

ブラジルの大統領弾劾と抗議デモ： なぜ人々は街頭に出るのか

近田 亮平

はじめに

筆者はブラジルでの現地調査のため、2016年4月後半から5月前半にかけ、リオデジャネイロ（以下、リオ）とサンパウロに滞在した。くしくも筆者が現地に着する直前の4月17日の日曜日、ブラジルでは左派の政権与党労働者党（Partido dos Trabalhadores: PT）のジルマ（Dilma Rousseff）⁽¹⁾大統領をめぐる弾劾告発が、下院本会議において賛成367票、反対146票（棄権7、欠席2を含む）で承認され、弾劾審議は上院へ回されることになった。下院本会議で弾劾採決が行われた際、513人の下院議員が一人一人、投票の際に演説も行ったため、弾劾可決の結果が出たのは日曜日の夜遅くであった。それにもかかわらず、ブラジルの主要都市では多くの人々が街頭に出て、ジルマ大統領の弾劾をめぐる採決を見守るとともに、反対または賛成の声を上げデモを行った。

また、時系列的にそれ以前となるが、3月4日、ジルマ大統領の前任者で国民から絶大な支持を集めたルーラ（Luiz Inácio Lula da Silva）前大統領（PT）が、石油公社ペトロブラス（Petrobras）をめぐる汚職疑惑により、警察当局から事情聴取や家宅捜索を受けた。すると、その直後に現政権や汚職に抗議する大規模なデモが計画され、実施された3月13日の日曜日には、ブラジル全土で同国史上最多となる約360

万人が参加したとされる。

ブラジルでは軍事政権下（1964～1985年）の1980年代前半、民主化要求運動が高まり、全国で多くの人々が街頭で抗議デモを行った。1992年にはコロール（Fernando Collor de Mello）大統領（当時）をめぐる汚職事件が発覚し、大統領の弾劾を求める抗議デモが全国に拡大し、コロール大統領を辞任に追い込んだ。その後、ブラジルの政治、経済、社会的な安定や発展とともに、全国規模の抗議デモはしばらく行われなかった。しかし、サッカーW杯を翌年に控えた2013年6月、巨額な支出を要するW杯の開催、政治不信、国民間の社会的な不平等などを争点として、約20年ぶりに国民の抗議デモが予測しないかたちで発生し、全国規模にまで拡大した⁽²⁾。さらに2015年には、ジルマPT政権に反対するデモが計画的に4回も実施され、初回の3月15日のデモには当時で最大規模となった約200万人が参加した。

最近の抗議デモの特徴として、今まであまり抗議デモに参加していなかった中間層以上や教育レベルの高い人々が、より多く参加している点が挙げられる。そのため本現地報告では、最近デモに参加するようになったこのような人へのインタビュー調査をもとに、ブラジルの人々はなぜ抗議のため街頭に出るのかについて、ブラジルの現状との関連から考察を行う。

1 リオデジャネイロの反政府デモ

はじめは、リオで反政府デモに参加したA氏へのインタビューである。A氏は、2016年3月13日のデモに人生で初めて参加した。なお写真1と写真2は、リオでイベントがよく開催されるコパカバーナの海岸通りにおいて、先述した3月13日の日曜日に計画的に実施された抗議デモの様子である。

A氏はリオ出身および在住の女性で、年齢は30代前半、大学の学部かつ職業専門コースを修了しており教育レベルは高い。既婚で1歳未満の子供が1人いるが、獣医としても働いている。夫は弁護士で海外出張が多く、夫の仕事の関係でドイツに1年半住んだ経験を持つ。家族で年に2回ほど海外旅行をするなど、社会経済的に上流階層であ

ると本人も認めている。なお、A氏および家族は白人系である。

またA氏は、政治的に支持する特定の政党を持たない無党派層である。同じ政党の政権が長期化すると不正が横行する可能性が高いと考え、大統領を含む選挙の際には政権与党とは別の政党に投票することが多い。PTのルーラが当選した2002年の大統領選では、中道左派とされるブラジル社会民主党 (Partido da Social Democracia Brasileira : PSDB) がそれまで2期連続して政権を担っていたため、当時野党だったルーラに投票した。しかし、つぎの2006年の大統領選ではルーラに投票せず、2010年の大統領選でもルーラの後継者で同じPTのジルマには投票しなかった。

抗議デモへの参加動機について、A氏はまず、



写真1 2016年3月13日にリオデジャネイロのコパカバーナ・ビーチで行われた反政府デモ (Cristiana Malta氏撮影)。



写真2 コパカバーナでの反政府デモ。黄色と緑のブラジル・カラーの服装をした参加者が多く、ビルの窓には「ジルマは出て行け (Fora Dilma)」と書かれている (Monica Beneduzi 氏撮影)。

現在の政府に対して不満を強く抱いていた点を挙げた。その不満とは、ルセフ政権によるものと認識している経済的な低迷や政府の統治能力の欠如、および、ブラジル政治に蔓延する汚職などである。

さらにA氏は、デモ参加の際の安全性を強調した。初めて参加した今年の抗議デモは組織化されており、参加しても安全だとA氏は感じたという。この点において、2013年6月の抗議デモは自然発生的かつ無秩序的であり、そこに参加することは危険をとまなうと判断したため参加しなかった。下院本会議が大統領の弾劾審議継続を決定した今年4月17日も、反政府派と政府支持派の両陣営のデモがコパカバーナの両端で

同時に実施されることになり、安全性に懸念があったため参加しなかった。なお、同様に組織的に行われた2015年の反政府デモにA氏は参加したいと考えたが、当時妊娠中だったため参加を断念した。

2015年の4回と2016年3月のデモは、「自由なブラジル運動」(Movimento Brasil Livre) や「街頭に来ようブラジル」(Vem Pra Rua Brasil) と呼ばれ、与党PTに批判的な社会運動団体などが主催するかたちで行われた。抗議デモの実施に関して、リオ市政府が許可を与え、州政府が警察を動員して動向を管理したため、A氏は安全だと考え参加した。時として抗議デモでは一部の参加者が暴徒化することがあるため、A氏は自身がデモに参加するか否かは安全が確保されると確信が持てたときのみだと述べた。

A氏は、参加の安全性を含めた抗議デモの情報をインターネットで入手している。今年3月の反政府デモに関しては、社会運動団体のサイトに直接アクセスしたわけではなく、フェイスブックなどのソーシャルメディアを通じて情報を入手し、子供を家政婦に預け、夫と友人たち4人でデモに参加した。デモの会場となったコパカバーナで偶然ほかの友人たちとも出会ったとのことで、このような知人との体験の共有は、A氏が感じるデモ参加の安全性を高めたと考えられよう。

A氏は、参加したデモの様子をつぎのように述べている。

「デモは非常に平和的であり、暴力的な行為をみることはなかった。参加者の年齢は幅広かったが、10代の若年層は少ない印象を受けた。小さな子供やペットを連れて参加していた人もいた。コパカバーナの大通りには多くの人が集まり、スピーカーを搭載したトラックも何台もあり、ブラジルの国歌を流すとともに、トラックの

上には社会運動や知識階層のリーダーが登壇し、ジルマ大統領の弾劾や現政府に対する不満を訴えていた。壇上で行われた演説は、政党的またはデモを政治利用するようなものは聞かれなかった。サンパウロではごく一部だがデモが暴力的になったことや、野党の政治家がデモを利用して反政府の演説を試みたが参加者に阻止されたことが報道された。

デモ参加者には、ブラジルの国旗を持ったり、国のカラーである黄色と緑の服を着たりした人が多くいた。汚職疑惑のあるジルマ大統領やルーラ前大統領を告発するような衣装を着た参加者もいたが、カーニバルのようなお祭りのな仮装をした人は私がみたかぎりではいなかった。カーニバルのようにデモを楽しんでいるという一部マスコミの報道や、アルコール飲料を飲みながら参加しているようなイメージがインターネットなどで流されたが、それは意図的なものであり、私がみたかぎりカーニバルのような雰囲気ではなく、平和的に政府への不満を訴えるデモであった。」

またA氏は、リオでデモが行われる場合、おもな開催地になるコパカバーナの地理的位置が重要になる点も指摘し、つぎのように述べた。

「リオでは多くの貧困層は北部に居住しており、南部に位置し、デモの会場としてリオ市政府が指定したコパカバーナまで来るには、時間がかかるだけでなく、交通機関を利用するので費用もかかる。2016年のデモは日曜日に実施されたため、平日に低賃金で労働し、PT支持者の多い北部居住の人々にとって、ジルマPT政権に反対するデモへの参加を目的として休日にコパカバーナまで来ることは、自身の利益と合致しないだけでなく、大きな負担となる。」

リオをはじめとするブラジルは不平等の大きい

社会であり、上流階層と自認するA氏にとって、貧困層の参加が困難だった点も自身の参加を後押ししたといえよう。

今年8月から開催される五輪に関しては、散発的な抗議デモが発生しても参加しないとのことであった。サッカーW杯開催前の2013年に大規模な全国規模のデモが発生したが、W杯期間中、抗議デモは散発的に実施されただけであり、五輪期間中も同様な状況になるとA氏は予想している。この点はA氏のなかで、五輪と現政府への不満とが直接的に関連していないこともあり、参加の安全性が確保されたとしてもデモには参加しない、という結論にいたると考えられよう。

2 サンパウロの政府または民主主義支持デモ

つぎは、サンパウロでのデモに参加したB氏へのインタビューである。B氏は、2013年の全国規模の抗議デモに初めて参加した。2015年の反政府デモには不参加で、2016年3月のデモには反政府側ではなく、政府または民主主義支持派として参加した。なお写真3と写真4は今年3月、先述した13日の反政府デモに対抗するかたちで、サンパウロの目抜き通りパウリスタ大通りで行われた抗議デモの様子である。

B氏は、サンパウロ市近郊のモジ・ダス・クルーズ (Mogi das Cruzes) 市 (以下、モジ) 出身の男性で、年齢は20歳代半ば、ブラジルの最高学府であるサンパウロ大学の都市建築学部の学部生である。以前は大学の学生寮に住んでいたが、経済的な理由から現在はモジで家族と同居している。同居家族は母親、祖母、出生直後から障害を持ち寝たきりの叔父で、家計の平均月収は2000リアル (インタビュー時の法定最低賃金は880リアル。US\$1が約



写真3 2016年3月、反政府抗議デモに対抗するかたちで行われた、サンパウロのパウリスタ大通りでの政府支持デモ (Andre Vieira氏撮影)。

3.5リアル)であり、決して裕福な家庭出身ではない。モジの自宅もファヴェーラ (不法占拠を起源とするスラム街)のすぐ隣にある。B氏はサンパウロ大学に進学し高学歴だが、自らを中下流層と認識している。なお、B氏の母親は黒人系で父親が白人系とのことである。

B氏はA氏同様、政治的に特定の支持政党を持たない無党派層である。しかし、自らの思想や主義は左派的だと述べている。家庭環境や学歴から判断した場合、B氏はPT政権下のブラジルにおいて、雇用状況の好転や政府の社会政策などにより社会上昇を果たした「新中間層」に属するといえよう。このようなB氏の社会経済的状況や左派的な考え方は、以下のような本人のデモへの参加動機と関連していると考えられる。

B氏は2013年と2016年の抗議デモに参加したが、その動機はおもに、前者は社会運動や貧困層への共感であり、後者は本人いわく「右派的」で「保守的」な政府当局への反感からである。2013年のデモの発端は、サンパウロ市の公共交通運賃の値上げであった。当初のデモは運賃値上げに反対

する社会運動や貧困層による抗議であり、B氏が働きながら大学に通うという状況で同様に公共交通機関を利用していたため、抗議デモの主旨に共感し参加したとのことだった。

自身の置かれた状況について、B氏は以下のように説明する。B氏は当初、政府の大学奨学金プログラム (ProUni) を得て、地元モジの私立大学に入学した。しかし、2011年にProUniの支給が停止されてしまい、授業料が必要な私立大学での就学を一時あきらめ、学費を貯めるため市政府の研修生として働いた。そして、予備校に通った後、サンパウロ大学の試験に合格することができた。サンパウロ大学は公立のため授業料は不要だが、就学にはある程度の資金が必要なため、中上流階層出身者である大半の学生と異なり、B氏は卒業まで学業のみに専念することが困難だった。そのため、政府の海外留学支援プログラム (Programa Sem Fronteiras) を得ようとしたが、同プログラムは2015年に対象者数が減らされ、2016年に中止されてしまった。このような個人的な経緯から、B氏は2015年のデモに参加する余

裕がなかったと述べている。

2016年は反政府や政府支持のデモが実施されたが、おもに後者のなかでは、ジルマ大統領が「クーデター」と称した弾劾の手続きや捜査当局の手法が非民主的であるとの観点から、民主主義を擁護する抗議も行われた。無党派層のB氏はジルマPT政権支持者ではないが、同氏が以下のように説明した動機をもとに、政府または民主主義支持のデモに参加した。

「デモに関して、実施許可の権限は市政府にあるが、警備する警察は州政府が権限を持っている。市政府は連邦政府と同じ左派のPT政権である一方、州政府は野党で右派的なPSDB⁽³⁾の政権である。そのため、野党が政権を担っている州政府管轄の警察が、連邦政府支持派のデモに暴力的だった一方、反政府デモに対しては一緒に写真を撮るなど非常に友好的であった。サンパウロの市政



写真4 サンパウロで行われた学生団体による反「クーデター」や民主主義擁護を訴えるデモ (Andre Vieira氏撮影)。

府や警察は差別主義的で、政府支持者、混血や黒人系の多い貧困層に対して暴力的になることがあり、私はそれに抗議するためデモに参加した。また、マスコミは反政府デモの参加者数が政府支持のそれをはるかに上回っていたと報道したが、私が知るかぎり双方の参加者数はほぼ同じであった。経済団体も、ジルマ大統領は罪を犯したわけではないにもかかわらず、弾劾キャンペーンを大々的に支援している。私はジルマ大統領やPTの支持者ではないが、このような現実を歪曲するような行為に対し非常に憤慨しており、そのため抗議デモに参加したのである。」

B氏がこのような見解を持つにいたった背景には、同氏が述べたように、通学しているサンパウロ大学のほとんどが白人やアジア系なのに対して自身が混血系であることや、政府支持者に混血系や黒人を含む中低所得層が多いことも影響していると考えられよう。なお、政権と警察の関係に関して、リオの場合、市政府と州政府とも、PTを批判して今年3月に連立政権から離脱したブラジル民主運動党 (Partido do Movimento Democrático Brasileiro : PMDB) 政権であるため⁽⁴⁾、B氏が述べるサンパウロのケースとは状況が異なる。



写真5 サンパウロのパウリスタ大通りの歩道でテントを張り、反政府の運動を行う人々。「労働者党は出て行け (Fora PT)」「今すぐ弾劾を (Impeachment Já)」と書かれていた (2016年5月9日 筆者撮影)。

おわりに

本現地報告の2人へのインタビュー調査は、以下のようにまとめることができよう。A氏に関して、自然発生的で長期化した2013年のデモとは異なり、A氏が参加した抗議デモは計画的に組織化されていた。つまり、デモを主催する社会運動などの団体に加え、その実施と形態に関して許可を与える市政府や警備を行う警察が、デモ参加の安全性を確保した点が、中上流階層で教育レベルの高い潜在的な参加希望者にとって重要だったと考えられる。B氏に関しては、主催団体や市政府がデモ実施の円滑化を試み、多くの人にとってデモ参加の機会がより開かれるようになった点に加え、政党の異なる州政府管轄の警察がデモに不当な力で介入したとB氏がとらえたように、新たな対抗勢力の存在が抗議の対象となり、デモへの参加を促したと考えられる。

また、A氏が述べる政府への不満、B氏が抱く当局およびマスコミや経済団体への憤慨、さら



写真6 サンパウロのキオスクで売られていた雑誌。弾劾審議が進み窮地に追い込まれたジルマ大統領やルーラ前大統領、汚職疑惑や議会審議の不正操作により停職となったクーニャ下院議長、次期大統領に就任するとみられるテメル副大統領が表紙を飾っていた(2016年5月6日 筆者撮影)。

に、両氏に共通するブラジルの経済状況の悪化とB氏の奨学金停止といった社会政策への悪影響など、社会や国民のなかで高まっている構造的な緊張状態が、人々を抗議のデモへ駆り立てているといえよう。そして、これらのことが要因となり、最近のブラジルで抗議デモのため多くの人が街頭に出るようになったと考えられる。

筆者が帰国した5月12日、ジルマ大統領は一時停職となり、PMDBのテメル(Michel Temer)副大統領を大統領代行とする暫定政権が発足した。しかし、ブラジルが陥った状況は依然として深刻かつ混沌としており、今後も少なからぬ人々が抗議デモに参加すべく街頭に出る事態は起こり得るであろう。

注

- (1) 日本では「ルセフ」と称されることが多いが、現地ブラジルでは「ジルマ」と呼ばれているため、本稿では現地の呼称に合わせる。
- (2) 2013年の抗議デモの詳細に関しては、近田 [2013] やKonta [2015] を参照。
- (3) PSDBは一般的に中道左派とされているが、最近ではより左派的なPTが政権を担ったこともあり、B氏のようにPSDBを“右派的”と認識する見方もある。
- (4) ただし、市長は今年3月28日から病氣療養中のため、暫定的に進歩党(Partido Progressista: PP)の市長となっている。

参考文献

- 近田亮平編2013.『躍動するブラジル—新しい変容と挑戦』日本貿易振興機構アジア経済研究所。
Konta, Ryohei ed. 2015. *The Post-New Brazil*, Tokyo: IDE-JETRO.

(こんた・りょうへい/アジア経済研究所)